

アイヌ口承文芸テキスト集5

白沢ナベ口述 ワウオリ：アオバトが生まれたわけ

採録・訳・註 中川裕

解説

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1992年6月11日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したカムユカラ「神謡」であり（整理番号：N9206011.KY）、2003年度千葉大学普遍教育科目「アイヌ語4」（中級後期）で教材として使ったものである。語り手の白沢氏については、『ユーラシア言語文化論集』3号（2000）のアイヌ口承文芸テキスト集1「狼から逃れた娘」を参照していただきたい。本編はすでに1994年に大谷洋一氏によって「アオバトの神が静かになくわけ」という題によって原文対訳で公表されているものであり¹⁾、その聞き取りおよび訳につけ加えるべきことは特にないが、その掲載誌を参照できる人は限られていると思うので、ここに再訳出することにする。

あらすじ

私（アオバト）は山の中にすんでいたが、ある日退屈なので人間の村近くに下りてきて、ワウオワウオと鳴いていた。するとそこに子供たちがやってきて、私の鳴き声の真似をする。私はそれに腹を立てたので、昼も夜も大きな声で鳴きつづけた。そのうちに私の声で、川は干上がったただのくぼ地になり、ただのくぼ地だったところは水が出て川になった。それでもやめずに鳴きつづけていると、オキクルミの神が窓から身を乗り出してこう言った。

「この悪いアオバトめ。お前はそんなことをするほどえらい神ではないのだぞ。昔、和人の侍がきこりになって、毎日山で木を切って暮らしていたが、ある日霧の中で道に迷って帰れなくなってしまい、とうとう息絶えた。その時自分の鬘^髻を切って投げ捨てた。その鬘は腐りきることができなかつたので、アオバトに生まれ変わったのだ。お前はそのようにして生まれたものなのだから、お前

¹⁾ 北海道教育庁生涯学習部文化課編(1994)『平成5年度アイヌ無形文化財記録刊行シリーズ7 オイナ（神々の物語）3』

の鳴き声を子供たちがまねしたとしても、腹を立てるほどよい神ではないのだ。この悪いアオバトめ。川が干上がるほど、夜も昼も鳴きつづけおって」

と、私をしかりつけた。私はそれを聞いて大変恥ずかしく思った。それからは鳴くときも大きな声を出さず、静かに鳴くようになった。

と、アオバトの神が語った。

解説

2003年は知里幸恵の生誕100年ということもあり、前期（アイヌ語3）では『アイヌ神謡集』²⁾をとりあげることにした。その中でも第6話の「ホテナオ 小狼の神が自ら歌った謡」のアイヌ語原文を語学テキストとして細かく読んでいき、その後（語学の授業ではあるが）口承文芸学的な話題に転じて、他の類話とともにその解釈について論じた³⁾。そして、後期（アイヌ語4）において、本編をそれらと対比しつつ解釈を行っていくことにした。

本編はいわゆる小鳥転生譚である⁴⁾。登場人物の出自ということをもチーフとする点で、もちろんこの話は「ホテナオ」とつながりがあるのだが、今回特に取り上げたのは、単なる転生譚という部分だけではなく、それを他人によって暴かれるという展開についてである。本編の主人公もホテナオの主人公も、自分の素性を知らないでいて何かの出来事に腹を立て、その結果他の登場人物（本編ではオキクルミ、ホテナオでは小狼の神）に素性を明かされるという展開になっている。ホテナオの主人公は小狼の神が前に立ちふさがるのに腹を立てるが、力によって道を空けさせようとするのではなく、一見無関係な素性の解き合いをしかける。そして自分の正体が明らかにされたところで、それ以上先へ進むのをやめて海に戻っていく。一方、本編の主人公は子供たちが自分の鳴き声を真似るのに腹を立て、川が干上がるほど泣き続ける。これもまた腹を立てた原因と自分の素性とは関係なさそうであるが、オキクルミにそれを明かされることで怒りをおさめ、大きな鳴き声を立

²⁾ 知里幸恵（1923）『アイヌ神謡集』郷土研究社

³⁾ これについては『ウエネウサラ』第9号（1991、私家版）という同人誌で、「変身するイヌンペイペ」という題で論じたことがある。

⁴⁾ 小鳥転生譚としての本編の類話について、および和人による東北地方の伝承との比較については、三浦佑之（1996）「ワオとマオーアイヌと東北と」（『口承文芸研究』第19号）に詳細に論じられている。

てるのをやめる。

「腹を立てる」ということが、それとは一見無関係な「素性を解き明かす」ということによって解決するという構図が、この両者の共通項であるのだが、その意味するところは何かというのが、授業でのひとつのテーマであった。本編の類話としてもっとよく知られているものに、更科源蔵が『コタン生物記』で紹介している一編がある⁵⁾。この話では、「腹を立てる」と「素性を明かす」ことの結びつきが偶然ではないことが、本編よりもより明確に示されている。『コタン生物記』には和訳しか掲載されていないが、『アイヌ伝統音楽』にこれの原文とみなされるものが掲載されているので⁶⁾、それを参照して原文対訳で示すことにする（アイヌ語表記および訳文は私のものに改める）。アオバトの鳴き声に悩まされたオキクルミが、窓から半身を乗り出して言うせりふである。

WAORI hekaci sinot	子供の遊びに
WAORI e=ruska kusu	お前は腹が立ったので
WAORI e=hawkor y_akne	鳴っていた（という）のならば
WAORI e=motoorke	（それは）お前の素性を
WAORI e=nu rusuy kusu	お前が聞きたいために
WAORI e=hawean hi ne kusu	（ワオワオと）いっているのだから
WAORI e=moto-orke	お前の素性を
WAORI a=ye kusu ne na	私が話してやろう。

ここでは、アオバトが腹を立てている本当の原因は、子供に鳴き声を真似されたことではなく、自分の素性を聞きたいため、すなわち自分の素性がわからないからだと言っている。この因果関係を理解するために、自分の素性を知らないということはどういうことかについて、あらためて考えてみよう。

⁵⁾ 更科源蔵・更科光（1977）『コタン生物記Ⅲ』法政大学出版局：625-626

⁶⁾ 日本放送教会編（1965）『アイヌ伝統音楽』：454-456。この神謡に限らないが、同書のアイヌ語の聞き取りは非常に誤りが多く、不完全なものである（たとえば、上記の引用箇所でも、e=moto-orke / a=ye kusu ne na という2行がすっぽり抜けている）。本稿では、NHK所蔵の原テープを参照して修正したものを掲げている。

すべての kamuy は kamuy mosir に自分の本来住むべき場所があり、そこから何らかの目的を持って人間世界を訪れ、その目的を果たしたら元の kamuy mosir に戻っていく。それが伝統的なアイヌの世界観である。すなわち自分の素性を知らないということは、自分がそこから人間世界にやってきたところの kamuy mosir がどこかわからないということであり、それ故に自分の戻っていくべきところを知らないということである。さらには自分が何のために人間世界にいるのかわからずさまよっているということにもなる。

このように考えていくと、彼らがちょっとしたことで怒りを爆発させ、その怒りをあたりに撒き散らそうとする心情も理解可能になる⁷⁾。ホテナオに登場する小男は、小狼の神に行く手をさえぎられて、「持ち前の癩癩を顔に表」す (kor wenpuri enantuika eparsere)。この kor wenpuri というのは、自分の普段隠し持っている激情というふうに読めるかもしれない。それが、ささいなことで表に噴出し、むき出しにされるのである。しかし、ホテナオの小男の場合にはその激情はコントロールされ、素性の明かしあいをしかけるという形で表出される。ここがホテナオとアオバトの話の違いであるが、それはホテナオの小男が何ゆえに人間の姿をして歩き回っていたかということの解釈につながる。小男はもともと Okikirmui の作った炉縁だったのが、神々の力によって inunpepeceppo という魚として転生され、海の中で腐り果てるのをまぬがれる。inunpepeceppo は魚としての自覚はあるが、自分がどこからやってきたのかは知らない。そこで人間の姿に変身して自分の素性を明かしてくれる相手をさがし求めて歩いている。そこに、主人公である小狼の神が行き会うのである。小狼はもちろんすぐ小男の素性と、彼が人間の姿をして歩いている理由を見抜く。そこで、前に立ちふさがって行く手をさえぎるわけである。

小男は相手の意図が何であるのかはともかく、狼という格の高い神の子供であることは見抜いている（だから、最後に「お前は、小さい、狼の子なのさ」と言い置いて去る）。そこで、自分の素性を見通す力があるかどうかを確かめるため、まず「この岬の、昔の名と今の名を」解き明かすことを求めるわけである。このように考えることによって、行く手に立ちふさがることと、素性の解き合いをしかけることとの関係が明確になってくるだろう。

小男は小狼の神の答えを iporohoka wenawena 「顔色を変え変え」聞いていたが、聞き終わると上

⁷⁾ この物語を自己喪失と疎外感の暴力的発露などという現代社会の文脈で読んでいくことは認めがたいかもしれないが、そういった感情は人間の心情として時代や場所を越えた普遍的なものではないかと思う。

述の「お前は、小さい、狼の子なのさ」というせりふを吐いて、人の姿を解いて海に戻っていく。なぜ変身を解いて、今来た海からの道に戻っていったのか？ 人の姿に変身してうろついていたこと自体が自分の素性を知るためであったのだから (yaishinrit erampeutek wa ainune yaikar wa iki koran 「その炉縁魚は、自分の素性がわからないので、人にばけてうろついている」)、小狼の答えで目的は果たしてしまった。だから、もう海に戻るしかないのである。

切替英雄氏は『アイヌ神謡集辞典』⁸⁾に収録された『アイヌ神謡集』のおもしろさ」という論文で、小男が「顔色を変え変え」自分の素性についての話を聞いていたという箇所について、「それは『私』に対する憎しみと怒りなのです」(499)と論じているが、私はそのようには解釈できない。日本語の表現で言えば、この iporohoka wenawena というのは、「顔色が青くなった」のであって、「顔を真っ赤にして怒った」のではないと考える。ipor 「顔色」が wen 「悪い」という表現は、砂沢クラ氏の『クスクップ オルシベ』⁹⁾ 67 ページにも出てくる。当時三歳の著者の妹が学校で iporohoka wen atukoyoyse 「青くなって はいた」あげく、病で死んでしまったという場面である。このようにむしろ気分が悪くなって青くなった様子を ipor wen で表すのだとすると、ホテナオの小男が iporohoka wenawena したのは、自分が追い求めていた「素性」が意外なものであり、また望ましくないものであったからだと考えられる。小男はもともと山のハンノキであり、それが Okikirmui によって炉縁に作られたあげく、出来が悪いというので川に流されたものである。小男が捜し求めていたものは、魂となった自分の戻っていく場所であったはずだが、小狼の答えでは魚となった今の自分にはおそらく戻って行きようのない場所なのである。小男は驚愕し、絶望しながら小狼の答えを聞いていた。それが iporohoka wenawena の理由だと私は考える。

同じような図式は『コタン生物記』のアオバトの神謡についても見て取れる。アオバトが子供たちのたわいもない遊びに腹を立て、夜も昼もかまわずなき続けるのを、自分の素性を知らぬことへのいらだちの表れということを見抜いた Okikirmui は、アオバトが元々は和人の鬻であったことを告げる。『コタン生物記』の話では、その結果アオバトがどうしたかについては言及されていないが、話の流れからいけば、その答えに納得して（あるいはショックを受けて）鳴くのをやめたということになるだろう。素性を明かされたことでなぜ鳴きやむのか。それはホテナオの小男と同じ理由である。和人の鬻が自分の出自とわかったからには、もう求めるべきことは何もない。帰るとこ

⁸⁾ 切替英雄 (2003) 『アイヌ神謡集辞典』大学書林

⁹⁾ 砂沢クラ (1983) 『クスクップ オルシベ』みやま書房

るのないアオバトはそのまま人間世界をさまようしかないのである。

さて、本編に話を戻すことにして、本編は一見『コタン生物記』の類話とほぼ同じ話のように見えるが、以上述べてきたことに関する限り大きな違いがある。それは Okikurmi がアオバトの素性を明かすのが、アオバトが「自分の素性を知りたくて」鳴いているのではなく、自分を pirka kamuy だと思っているからである、という視点から描かれているということである。つまり、本編ではむしろ自己喪失による怒りというより、自分のプライドを傷つけられて怒っているような描き方である。この変質についてはどう考えればよいのであろうか？

前記の類話について『伝統音楽』ではこのような注記がある。「青鳩は鳴き声から、好感をもたれない鳥として、山に迷った柚夫の鬣が鳥になったと伝えられているが、カッコウが人間の子供に鳴き声をまねされて怒って、川の水を涸らしたというのに似ている」(456)。この「カッコウが…」というのは、同書 461-463 ページに収録されている HAN KAKKOK というサケへの神話のことを指すと思われる。この話では、親の目をぬすんで人間の村に下りたカッコウが、人間の子供が自分の声を真似したのに腹を立て、川の水が涸れるまで鳴きつづけた。そこにオキクルミが出てきて、両親にいいつけて地獄に落としてやるぞと叱りつけた。家に戻ると両親にさんざんなぐりつけられて叱られた、という展開になっている。転生譚の部分を除けば、本編は展開としてはむしろこちらに近いことがわかる。このタイプの、親の目をぬすんで人間界に下りてそこを荒らしてしまい、親にひどく怒られるという話は、シマフクロウの話としても記録がある¹⁰⁾。つまり、カッコウとかシマフクロウとかいった、「まっとうな」出自を持つ鳥の神の話としてこのタイプが伝えられていることになる。すなわち、本編はホテナオタイプの転生者による自己捜索の話と、カッコウ・シマフクロウタイプの乱暴な子供の鳥が戒められる話との混交した形ということになるだろう。

興味深いことに、白沢ナベ氏にはもうひとつ同じ WAWORI というサケへを持ち、アオバトを主人公とする話がある¹¹⁾。そして、それとほぼ同じ話が、久保寺逸彦編『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』に、やはりカッコウの話として記録されているのである¹²⁾。すなわち、本編でアオバトとカッ

¹⁰⁾ 大塚一美編 (1990) 『キナラブックロ伝 アイヌ民話全集』 1、北海道出版企画センター：第九話「海の化物の悪口に立腹し、翼を煽って大嵐にした、若い国土の守り神 (シマフクロウ) の自叙」

¹¹⁾ 白沢ナベ・語り、中川裕・訳註 (1990) 「アオバトが小さくなったわけ」北海道教育委員会編『オйна (神々の物語) 1』

¹²⁾ 久保寺逸彦編 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店：神謡 45 「郭公鳥の神の自叙」

コーが混交しているのは、単に他の話のモチーフが紛れ込んだというのではなく、アオバトとカッコーという鳥のカムイとしての位置づけの問題に関わっているかもしれないのである。

しかし、このように「混交」ととらえるべき点はあるにせよ、本編が転生譚としてホテナオや『コタン生物記』の類話と共有する見逃せない特徴がある。それは、これらの話において小男やアオバトは転生する前の記憶を失っているということである。そのことの重要性は『神謡・聖伝の研究』の「古船の神の自叙」¹³⁾という話と比較すれば明らかになる。同話では空知川の滝の上に立つ立木の神が、大オキクルミに伐られて船に作られ、何年か後にその子供である小オキクルミを乗せて交易に赴いた帰路、難破して粉々になるが、小オキクルミによって祀られ、空知川の元の切り株の上から天上の神の世界へ戻るということになっている。この話では onnecipkamuy「古船のカムイ」の意識は sirkorkamuy「大地のカムイ＝立木のカムイ」の時から連続しており、それゆえに舟としての生涯をまっとうすると、その前身である立木であった時にいた場所へ戻っていくことができ、さらにそこから本来の住処であるところの kamuy mosir へと戻っていくのだと解釈される。まっとうな過程を踏まない再生は、永遠に循環していくはずの魂の、アイデンティティの連続性を途切れさせ、それゆえに戻っていく場所を失う。そういう思想がこれらの話の背景にあるのではないかと考える。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。…とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、*re … などのように*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合のみ、示してある。原文テキストとその訳は、段落ごとに対応するように左右に並べて提示した。註は各ページごとに脚註の形で示した。

¹³⁾ 久保寺逸彦編 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店：神謡 69「古船の神の自叙」

本文

WAWORI	kim ta patek	ワウオリ	山の中にばかり
WAWORI	an=an ki na	私	はいて
WAWORI	tanpe kusu	それ	なので
WAWORI	sineantota	ある日	のこと
WAWORI	wawo wawo	ワウオ	ワウオと
	rek=an ki kor	鳴き	ながら
WAWORI	aynu kotan	人間	の村
WAWORI	kotan teksama	村	のかたわらを
WAWORI	a=eot ki ki wa	訪れ	に
WAWORI	san=an hine	山	を下りて
WAWORI	aynu kotan	人間	の村
	kotan karanke	村	の近くで
WAWORI	rek=an ki na	鳴いた	のだ。
WAWORI	wawo wawo wawo wawo	ワウオ	ワウオ ワウオ ワウオと
	rek=an awa	鳴く	と
WAWORI	aynu hekattar	人間	の子供たちが
	uekarpa wa	集ま	ってきて
	wawo wawo	ワウオ	ワウオと
WAWORI	haweoka kor	言	いながら
WAWORI	koaneyukar ¹⁴⁾	まね	をする。
WAWORI	newaanpe	それ	に
WAWORI	a=ruska kusu	腹	が立ったので

¹⁴⁾ koaneyukar : この動詞は分析が困難である。koeyukar であれば、ko- 「～に対して」 e- 「～について」 yukar 「真似る」と解釈ができるが、an- は古い人称接辞の残存形と見るには位置がおかしく、ar- 「全く」の変化形と見るのも困難である。参考： koeyukar 【複他動】 (人)の(言葉の言い方やしぐさ)をまねする(ものまねのように) (沙流方言辞典)

WAWORI	kunne hene	夜も
	tokap hene	昼も
WAWORI	rek=an ayne	鳴いているうちに
WAWORI	pet ne usi	川であるところが
WAWORI	kot ne paye ¹⁵⁾	ただのくぼ地になっていき
WAWORI	kot ne usi	くぼ地であるところが
WAWORI	pet ne paye	川になっていく。
WAWORI	kunne hene	夜も
WAWORI	tokap hene	昼も
WAWORI	iruska yuppa	おおいに腹を
	a=ki p ne kusu	立てていたもので
WAWORI	cis=an ki na	泣き続けたのだ。
WAWORI	*re...rek=an...	な... 鳴いた...
	cis=an a pe でない ¹⁶⁾	泣いたんではない。
	rek=an ki na	鳴き続けたのだ。
WAWORI	ki akusu	すると
WAWORI	sineantota	ある日のこと
WAWORI	Okikurmi kamuy	オキクルミの神が
WAWORI	puyar ka eosma	窓から身を乗り出して

¹⁵⁾ kot ne paye : 移動の意味をとまなわず、純粹に「～に変化する」という意味の「～になっていく」を表すこの～ne paye という表現は、白沢氏の yukar において、戦っている最中に意識が朦朧として何がなんだかわからなくなってきたことを表す a=siketoko tup ne arpa rep ne arpa 「目の前がふたつになって行き、三つになっていく」という表現でも用いられているが、どちらも常套句的な表現であるので、どのくらい日常的な語法として生産性があるかについては不明である。

¹⁶⁾ cis は「泣く」、rek は「鳴く」。アイヌ語としては全く別の単語であるのだが、ここで言い違えているのは、日本語の連想がはたらいているからなのか。あるいはここでのアオバトの心情を cis と表現してしまったものの、ちょっと違うと思い直したのか、いずれであろうか？ なお、註 20)、21) 参照。

WAWORI	tan wen wawo	「この悪いアオバト
WAWORI	sirun wen wawo	しょうもないアオバト
WAWORI	pirka p	お前は素性の良いもの
	e=ne ruwe ka	なんかでは
	somo tapan na	ないのだぞ。
WAWORI	teeta kane	昔
WAWORI		
	髪ゆった人なんだっけ？ さむらい？ ¹⁷⁾	
WAWORI	SAMURAI sekor	さむらいと
	a=ye sisam	言われる和人が
WAWOR	YAMANKO ne wa	きこりになって
WAWORI	kim ta arpa	山に行き
WAWORI	kes to an kor	毎日毎日
	ni tuye wa	木を切って
WAWORI	sanke ki kor	里に下ろしては
	an ki awa	暮らしていた。
WAWORI	sineantota	ある日また
WAWORI	kim ta arpa	山へ行った。
WAWORI	enuki awa	すると
WAWORI	urar_ ran w_a	霧が下りて
WAWORI	hosipi ka eaykap	帰れなくなった。
WAWORI	omanan a omanan a	行けども行けども
	sitturaynu wa	道に迷って
	omanan ki na	歩き回ったのだ。

¹⁷⁾ ここで白沢氏がいったん語りを止めて「さむらい？」と、たずねたので、筆者が「うん」と返事をしている。

WAWORI	hosipi niwkes	家に戻ることができず
WAWORI	tan pe kusu	それゆえに
WAWORI	omuyepihi ¹⁸⁾	齧を
WAWORI	kursutu wano	根元から
WAWORI	tuye ki ki wa	切って
WAWORI	eyapkir ki na	投げ捨てたのだ。
WAWORI	orowa kayki	そして
WAWORI	omuyepihi	齧は
WAWORI	munin ki na	腐ってしまった。
WAWORI	arikinne	まるつきり
	ear munin	すっかり腐り
	wen munin	腐りきってしまうことが
	niwkes kusu	できなかつたので
WAWORI	wawo ne an ¹⁹⁾ na	アオバトになったのだ。
WAWORI	newaanpe	ということ
	ne ruwe ne	だったのだ
WAWORI	siran ruwe	そういう次第
	ne hi tapan na	なのだから
	e=cis ki ... e=rek ki hawe ²⁰⁾	お前の泣く ... 鳴く声を
	hekattar utar	子供たちが
WAWORI	nu ki ki wa	聞いて

¹⁸⁾ omuyepihi : o-「～の尻」 muye「～を束ねる」 -p「もの」 -ihi (所属形語尾) = 「根元を束ねたもの」

¹⁹⁾ この ne は動詞ではなく転成格「～に (なる)」の格助詞と見るべきもの。 an は「ある」というより、～ne で指し示される状態に「なる」ことを表すと考えられる。

²⁰⁾ ここでも註 16)と同じ言い直しが行われている。

WAWORI	e=koaneyukar	まねをした
WAWORI	ki yakkayki	からといって
WAWORI	e=ruska kuni p	腹を立てるべきもの
WAWORI	somo tapan na	ではないのだぞ。
WAWORI	tan wen wawo	この悪いアオバト
WAWORI	sirun wen wawo	しょうもないアオバト
WAWORI	kunne hene	夜も
	tokap hene	昼も
	e=cis ki ayne	お前が泣いたおかげで
	e=rek ki ayne ²¹⁾	お前が鳴いたおかげで
WAWORI	kot ne paye	くぼ地になり
WAWORI	pet ne paye	川になり
WAWORI	pet ne rok pe	川であったものが
WAWORI	sat wa paye	干上がってしまった。
WAWORI	tan pe pakno	それほどまで
WAWORI	e=ki rek anak ²²⁾	鳴いたのは
WAWORI	e=wen katuhu ne	お前の過ちだ。

²¹⁾ cis を rek と言い直すのはこれで3回目である。ここまでの言い直しの例から見て、ここで e=cis ki ayne と e=rek ki ayne が対句になっているという見方は難しい。しかし、rek と言うべきところをどうしても cis と言ってしまふ心理的な力が働いていることは確実である。

²²⁾ このような構文について、田村すず子氏は『アイヌ語沙流方言辞典』(1996、草風館)の中で、「【自動】(人称変化は他動詞型)」という解釈を行っている。たとえば、「ki-cis[ki-cis ...をする・泣く] 泣く (cis の強調形。a=ki-cis ani kunne hene tokap hene i=koyaywennukarpa 私が泣くために両親は夜も昼も切ない思いをした)」。しかし、この a=ki cis の例も、本文の e=ki rek のような例も、cis、rek がそれぞれ名詞として扱われており、a=ki、e=ki が連体修飾句となっているという解釈でよいのではなかろうか。そうすれば、自動詞だが他動詞型で変化するというような変則的な語類を立てなくてすむ。a=ki cis、a=ki rek の後に、ani のような格助詞や、anak のような提題の副助詞が来ているのも、このことの裏づけになるであろう。

	pirka kamuy	お前はよい神
	e=ne ruwe ka	などでは
	somo ne kusu	ないのだから
WAWORI	a=e=koaneyukar yakka	まねをされたからといって
	e=ruska kuni p	腹を立てるべきものでは
	somo tapan na	ないのだぞ。
WAWORI	tan wen wawo	この悪いアオバト
WAWORI	sirun wen wawo	しょうもないアオバト」
WAWORI	hawas ki kor	と、言いながら
WAWORI	a=i=kopasrota	私をしかりつけた。
WAWORI	ki wa ne ki kor	そうすると
WAWORI	tu siyorpa=an ²³⁾	私はおおいに驚き
WAWORI	wen siyorpa=an	ひどく恥じ入った
WAWORI	a=ki ki ki kor	そうして
WAWORI	orowano anak	それからは
WAWORI	rek=an hawe	鳴く声も
WAWORI	hawkeno rek=an katu	静かに鳴くように
WAWORI	ne ruwe ne	なった。
WAWORI	yaysitoma	恥ずかしく
	a=ki ki ki wa	思っ
WAWORI	eytasa poro rek anak	あまり大きな鳴き声は
	a=eaykap kusu	できなくなったので
WAWORI	(以下散文)	

²³⁾ siyorpa : 久保寺辞典には siyor keutum で「驚嘆の心」とあり、また siyorpa で「懲りる」として
いる。この両者に共通する siyor の部分は同語根でないかと思う。白沢ナベ氏はこの部分の siyorpa
について「ひどい恥かいた」「大恥かいた」と説明している。それらをひとまとめにして、「意外な
ことに直面し、恥をかいて懲り懲りする」ということではなかろうかと解釈した。

pon rek a=ki hawe ne kusu
pirka kamuy a=ne humi ne
kuni a=ramu wa
a=i=koaneyukar wa kusu
a=ruska kusu
kunne hene tokap hene
rek=an w_a
pet ne rok pe a=satke
kot ne rok pe pet ne paye
rek=an ruwe ne a korka
tu siyorpa=an wen siyorpa=an
SAMURAI otopihi
kursutu wano tuye wa
osura wa newaanpe
wawo ne yaykar katu ne
sekor a=i=ye wa
wen siyorpa=an tu siyorpa=an
a=ki kor orowano
rek anakne
eytasa an ka somo ki
hawe ne kusu
a=ye hawe ne na
sekor wawo kamuy isoytak
kamuy itak
kamuy だか
otop だか (笑)。

小さな声で鳴くようになったので
私は自分がよい神である
とっていて
まねをされたので
腹を立てたので
夜も昼も
鳴いて
川であったものを干し上げ
くぼ地であったところは川になる。
(そのように) 鳴いたのだが
ひどく恥じ入った。
さむらいが髪のを
根元から切って
捨てたものが
アオバトになったのだ
と言われて
ひどく恥じ入った。
それからは
鳴き声は
あまり立てないようにして
いるので
その話をしたのだ。
と、アオバトの神様が語りました。
神様の話。
神様だか
髪のをだか。

(なかがわ ひろし・千葉大学文学部)